

---

**プロリーが幻想入りです・・・はい**

スカイワッフル

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブロリーが幻想入りです・・・はい

### 【NZコード】

N7154W

### 【作者名】

スカイワッフル

### 【あらすじ】

伝説の超サイヤ人ブロリー。

悲しみや怒りなどの感情を破壊でしか表現できなかつた男。

制御できない本能と破壊衝動の逝くままに生きた。故に貴方はこう呼ばれた悪魔と。そしてある日悪魔は太陽に突つ込み、死亡する。そして彼はあの世へ

だがしかし！彼がいつたあの世は『幻想郷』のあの世！

彼はその闇魔に『転生』を命じられ、幻想郷で第二の人生を過ごすことに

ブロリーの幻想入りリー小説です。

ほとんどギャグ、たまにシリアス入れる予定です。この小説のブロリーは紳士的です。多分。さらにはあまり伝説の超サイヤ人にはなりません。いわゆる奥の手扱いです。

これらの要素が苦手なお方は、戻つて帰れるとイイナア。

・・・・はい

## 悪魔への裁き（前書き）

ブロリー「ブロリーです。今回は俺が幻想入りです」

## 悪魔への裁き

あるところに、最強といつぱりふさわしい悲しみの戦士がいた。

彼はある星の王国で生まれる。

生まれた彼の戦闘力が以上にまで高く、王は自分の邪魔になりかねないと見なす。

もちろん、父親は反対し王に助けてもらつよう頼み込んだが

しかし――

「お前の一緒に死ねッ！」

父親は息子もろとも討ち捨てられた。

しかし、不幸中の幸い、だらうか

その星の爆発時、息子の潜在能力が發揮。

まだ幼く喋れないという子供だというのに、父親も匿うバリアーで、空気のない宇宙でも活動する事ができた。

その後、息子はすくすくと成長した――恐ろしいパワーを付けて。

そして――何年もの歳月が過ぎ――

彼は、父親も目的も何もかも、失ったのだ……

\*

死んだ。

悲しみの戦士であり伝説のサイヤ人、アロリはそう悟った。

死んだ筈だった。しかし、意識がある。

サイヤ人の姿になつていた。

そして自分は草原に倒れてる。そして傍に川があつた。

佐古・二ノ丸疑問力豆川河内

いや、そんな疑問はどうでもよかつた。

彼の頭に浮かんだ事は、それだけではなかつた。

いや、死んだという事実よりも、重い真実が浮かんだから。

「カアカロツトオ・・・・・ツニ

そう、宿敵がない。

彼には宿敵がいた。しかし、自分は死んでいる。

悔しさが募つた。

スツ

何かが目の前に現れた。

ブロリーはボケた様にポカーンとしてたが、

驚き、目を見開いた。

よつやくそれが生き物だという事に気がつく。  
その者は、女性だった。赤身の髪を持ち、両側に分けて結んでいた。  
そして最大の特徴として、鎌を持っている。

彼女は疑問気な目でこちらを見ていた。  
しかしどちらかと言つとブロリーが疑問気だった。

「あんた、何驚いてんのさ。と言つか、あんた幻想郷の住民じゃな  
いね」

幻想郷？

ブロリーは頭が混乱する。

死んだ。けど、生きている。

しかも次は人と合い、さらには意味不明な単語を聞かされる。

そんな理解不能な表情のブロリーに、彼女は追い打ちをかける様に  
話かけてくる。

「まあいこさ。さあ、船にのりなよ

笑顔で言い、川の方向を親指で指差す。

そこには川に浮かぶ、少しボロイ船があつた。  
ブロリーはもうどうしたらいいのか解らない。

寝ころんだまま混乱するブロリーに、彼女は「もう」と不機嫌そ  
な声をだす。

「そら、筋肉好青年さんー早くしなよー」

「ふ、ブロリーです…」

\*

なんか強引に船に乗らされた。

強引過ぎて、一瞬『超サイヤ人』になる所だった。  
しかし、なんだか…頭の整理がつかなかつた。  
そのせいで超サイヤ人になる事すらできなかつた。

それより、自分以外にも船に乗せられた者も数人いた。  
皆普通の人間に近い気が感じられた。少し違うが人間にもつとも近  
い。

しかし、彼女は違う。なんだか人間とは違う『何か』を感じられた。  
『氣』ではないが、『力がある』と言つ事は解つた。  
しかし、自分には及ばないのも確かだと感じる。

「ん?なんだい、何か言いたそつた表情だけど?」

「…いや…なんでも」

短く答える。

彼女はおかしな者を見る様な顔になる。

「あんた、本当に口数すくないねえ」

「・・・・・・・」

ブロリーは黙りこむ。

何も返す言葉が考えつかなかつたからだ。

彼女はフウ、と息を吐いた。

「ほんと、変な奴」

\*

なんか雰囲気に身を任せていたブロリー。  
しかし、なんだか変な所に来てしまった。  
そこは地球でいう裁判所の様な場所。  
自分が大きな部屋の中心にいて、その前に少し立派な椅子とテーブ  
ルに座つた豪そうな人物がいた。  
偉そうでも、少女だ。

何やら小さい板を持つていて

「では、裁きを始めます」

裁き！？

ブロリーは驚く。

そして『裁き』といつ言葉に、何かをされると悟つた。

バシュウウウウンンシ

ブロリーの髪が金色になり逆立つた。

さつきまで黒かつた目が、緑色の眼光を放つていた。

そう、彼は『超サイヤ人』になつたのだ。

その気になれば『伝説の超サイヤ人』になれるが、まずは様子を見  
る事にする。

対する少女は少し反応し、ため息を吐いた。

「はあ、あつちも余計な手違いをしてくれましたね…。おかげで苦労しそうです…」

なんだか皮肉を言つていた。  
ブロリーにはイマイチ理解できない。  
だからまず聞く事にした。

「お前に聞きたい事がある」

さつきまで静かだったブロリーだが、超サイヤ人になる事で性格も  
変わり、口調も変わった。

「なんでしょうか？裁判中に私語は謹んでもらいていいんですが

「(イ)は何だ。そしてこれから何をするんだあ？」

「裁判ですよ。これから貴方の罪の重さを調べるんですよ

彼は目を細めるが、すぐに笑う。

「はつはつはつはつはツーこの俺を裁けると思つていいのか？」

「はあ、もういいですか？裁判に戻りたいんです」

「いいだろ？。聞いてやる」

少女はため息をついたが、真面目な表情になり、口を開く。

「貴方は激しく者を憎みすぎている。

貴方の死因は異常な執着心とも言つていい。その執着心が貴方を滅ぼした。

さりに貴方はある星を一つ破壊している

「言いたい事はそれだけか？」

「いいえ

貴方は、誰にも理解されずに生きてきました

ツ！

ブロリーは目を細め、驚いた様な表情を浮かべた。

彼女の言葉には、説得力があった。

いや、彼女の言つた事は事実。

ブロリーは確かに、誰にも理解されなかつた。

それどころか、父親には利用される始末だつた。

そして彼は憎しみで全てを破壊して

「貴方は実に驚異的な力を持つていた。

その力ゆえ、親ともども討ち捨てられた。

さらにその力を利用され———ある銀河を破壊し廻ぐした。  
理解者がいない、そんな孤独な日々を過ごし、本当の仲間がいな  
い。

歪んだ執着心もそのせいでしょう。

貴方は本当は良い人格の筈です。しかし、運命が悪の道へと誘い  
込んだ「

プロリーは思いつめた様な表情になる。

どこか、寂しげでもあり、喜劇な表情でもあった。

「・・・・・」

「同族には殺されかけ親にさえも見捨てられた。貴方はそんな悲しみや怒りなどの感情を破壊でしか表現でき なかつた。  
制御できない本能と破壊衝動の逝くままに生きた。故に貴方はこ  
う呼ばれた悪魔と。

貴方は哀れな人物です。それも、自分ではどうにもできない。  
しかし貴方の存在は悪ではなかつたとは言えない。

「  
……」

気づけば、プロリーの姿は普通の『サイヤ人』に戻っていた。  
その思いつめた表情に、少女は同情するような表情を向けた。

「さて、これは裁判が難しい所ですが、白黒はつきりつけさせても  
らこますよ」

彼女は、数秒間目をつぶつた。

静かに、何かを悟る様に、そして感じ取るようになり——  
そして——

「裁判の結果は『転生』です。執着心を捨て、もつて一度『本当の貴方』として生きるのです」

ブロリーは、今何が起きているのかよく解らない。  
ただ彼女の言葉を聞いていただけだった。

悟ろうにも彼の頭脳では無理だった。

意味が解らない。だが、一つだけ理解できた事はあった。

自分を認めてくれる者もいるんだな·····と、

ふと、一瞬笑ってしまった。

今までにないくらいに、純粋に。

## 悪魔への裁き（後書き）

閻魔さん「では、貴方は幻想郷で暮らしてもらいます」  
ブロリー「はい・・・・」  
閻魔さん「・・・・あの、理解できますか？」  
ブロリー「幻想郷ってなんだあ？」  
閻魔さん「それは次回のお楽しみですよ」  
ブロリー「がっかりーです・・・・」

これ幻想郷へ やる気のない伝説（前書き）

ブロリー 「ブロリーです。ついに幻想入りーです」

## これ幻想郷へ やる気のない伝説

ブロリーは死んだ。

しかし、ブロリーは何故か『幻想郷での裁判』を受ける事となる。

どうやら、あの世での手違いがあつたらしく、幻想郷に来てしまつていた。

そして、そして幻想郷の閻魔に裁判された。

当の閻魔様は手違いでせいで、厄介の者が来た。と嫌み言つていたが、見事裁判に成功。

結果は『転生』である。

当のブロリーは、何が何だか理解はできなかつたが、少し安心した氣分になつた。

\*

「・・・・・・・」

ブロリーは、幻想郷の閻魔に『転生』を命じられたブロリー。

なんやかんやで空氣に身を任せた結果、幻想郷という地に行くよう

に言われた。

あまり詳しい説明はされたかった。

だが説明されたとて、ブロリーに理解する事はできぬう！

しかし、彼はあまりそう言う事などひづりでも良かつた。

ちなみに、だが現在、普段のサイヤ人状態だ。

彼は幻想郷の東の端の端に位置する『博麗神社』に居た。

と言つより、強制的にここへ移動させられた。

もんじく

静かで低い声たゞた

そして彼は気がついた。

—

神社の階段から見た光景は、安らぎその物だった。壮大な自然が広がっていた。一面、まるで理想郷。多すぎない建物に数多い自然。

しばらく、彼はそんな光景ひ漫つていいたが

「あッ！？」

自分の真後ろに何者が気配を感じられた。それはサイヤ人としての能力が働いたからだ。

そには

「うわっ！ いきなり大声出さないでほしいぜ！」

・・・・・  
だ、誰だあれ・・・?

金髪で魔法使いみたいな格好をした少女がいた。

ブロリーは逆に戸惑つた。

「おつと、他人に名前を聞くときはまず自分から名乗るのが礼儀だぜ」

「・・・ブロリーです・・・」

「私は霧雨魔理沙だぜ」

「・・・」

「黙るなよ、反応に困るだろ?」

少女——魔理沙は少し戸惑う。

魔理沙はまあいいや、と呟くとこう続ける。

「何で神社に来てるんだ?・・・見た感じ、お前は外来人らしいな。見ない顔だし。」

彼女が言つには、この地にとつては外来人らしい。  
いわゆる、外から来た人。

ブロリーは身長2メートル以上ある。そして体格は筋肉質であり、  
しなやかな長い手足をしている。

顔も良い。イケメンだ。

こう言うレベルはまだ人間と呼べるだろう。

しかし、彼は人間ではない。サイヤ人だ。

そして彼はそのサイヤ人の中でも最強クラスのサイヤ人。  
まあ、そんな事は見ただけでは魔理沙は理解できないだろう。

「・・・外来人・・・ってなんだあ?」

魔理沙はあく、と面倒臭そうな声を出す。

「やつこつ事は靈夢に聞くといにゃ」

「…………靈夢つて誰だあ」

「」の神社の巫女だぜ」

魔理沙がそう言つた瞬間、神社の庭から誰かが出てきた。  
魔理沙はそつちを向き、少し笑つた。

「尊をすればなんとやひ、つてこの事か？」

そつ、庭から出てきたのは博麗の巫女、博麗靈夢だつた。

靈夢はブロリーを見るなり「」。

「あんたがブロリーね。閻魔から聞いてるわ。まず神社に入つてくれるかしら？」

靈夢がブロリーに向かつて手招きをする。

黙つてついていった。

「・・・・・」

\*

博麗神社の座敷だ。

それぞれ靈夢とブロリー + 魔理沙

が居る。

「・・・魔理沙がいる事にはつっこまないとして、ブロリー。あなたには幻想郷に置いて知つてもらひつ事が山ほどあるわ」

「・・・」

-少女説明中-

「というわけだあ！」

「親父イガ黙る意思を見せなければ、このP.O.Dを破壊し尽くすだけだあ」

「やめるブロリー！落ち着けえ！」

「とつておきだあ・・・ツ」

「テテーン

「これが本編だと思つてゐるのか？」

\*

靈夢の説明が終わつた。

彼女はブロリーに、幻想郷の事、人外である種族、スペルカードなどについて話した。

「・・・」

「あんた・・・本当に理解してゐるの？」

「・・・はい」

彼女の説明が上手かったのか、ブロリーは理解できた様だ。  
と、言うより。普通なら驚いたりするのが上等の反応だ。  
しかし、ブロリーは理解しても、そんな事はどうでもいい話だった。  
何せ、目的がないのだから。生きていくといつ事さえも目的の内に入  
っていない。今は――

「驚いたりするのが上等の反応だぜ?」

魔理沙が言つた。

「・・・・・俺には、そんな事はどうでもいいことだ・・・・・

いつもの低く大人しい声で言つた。  
靈夢と魔理沙は何かを言つた。その顔になつたが、その表情は呆れ  
たようになりため息をついた。

「まあ、たまには」つい反応の人もいるのね

「なんか、落ち着き過ぎじゃないか?」

「・・・そんな事ない・・・・。それより、出てついいかあ・・・・  
?」

「え?、ええ。まあ、説明する事は全部説明したし・・・・

「じゃあな」

そう言つて、神社の庭へと出ると――ズキュウウウウン!

そのまま宙に浮き、かなりのスピードで何処かへと飛んで言った。

それを見ていた靈夢と魔理沙は

「・・・あれ？あいつ外来人じゃなかつたけ？」

「そ、さあ・・・。とと言つよつ、あいつって人間なの？外の世界には浮遊できる人間なんて一握りもいない筈だけど・・・」

驚愕していた。

これ幻想郷へ やる気のない伝説（後書き）

ブロリー 「ブロ（「」y 今日はゲストの靈夢と魔理沙がいます…」」

靈夢 「博麗靈夢よ」

魔理沙 「魔理沙だゾ」

ブロリー 「二人は仲がいいのか…？」

靈夢 「良い分類なんぢやない？」

魔理沙 「ああ、いつもお茶を飲ませてもらつてるぜ」

靈夢 「お賽銭を置いていってほしいわね」

ブロリー 「とつておきだあ・・・・・はい、?円です…」

靈夢 「できればもつと・・・・・つて何この縁怪人！？」

？ 「ふん、化け物め。好きにしろ」

ブロリー 「また一匹虫けらが死にに来たか」伝説化！

？ 「10円！」

ドカ、ダツダツダツダツダ

？ 「クソマア！」バキイツ

ブロリー 「…おもしろくないです」シユウウウ 戻リーです

靈夢 「いや、あんたが勝手に出して飛ばしたんでしょ…」

魔理沙 「でも凄い戦闘だつたぜ！瞬殺だつたし」

ブロリー 「もつと褒めてほしいなあ…」テレツ

紅い館 戦つて和解 紳士のクロニー（前書き）

ブロリー 「ブロリーです。紅い館に入リーます」

紅い館 戦つて和解 紳士のプロリー

「……………せぬ」とも……………何もない……………」

ブロリーは、適当に空を飛んでいた。

彼は本当にやる事がない。  
宿敵がない—— それだけで、  
気が失せる。

グウウウウ・・・・

• • • • • !

と、そんな空気を壊すかの如く、腹が鳴る。

「・・・ご飯・・・ですかあ・・・・・」

\*

ブロリーは食糧を探し求め、幻想郷を飛びまわる。

そして

「・・・・・紅い、館か・・・・・」

ブロリーは、大きな湖の近くにある紅い館を見つける。  
ブロリーはこう考えた。

豪華そうな館＝大量の財産＝大量の食糧

「……ふふ」

いつも無表情な彼だが、ほんの少し、笑つた。

\*

「……」

「あ、あの、どちら様で？」

紅い館の門まで来たのだが、誰か居た。

「他人に名前を聞くときはまず自分から名乗るのが礼儀……だ

と、ついさつき会つた魔理沙の言葉を適当に生かした。

「あ、しつれいしました！私は紅美鈴と言います！」

紅美鈴——この館の門番をしている妖怪だ。

「……ブロリーです」

「ブロリーさんですね。解りました。それで……何か様ですか  
ブロリーさん」

「『飯を食べたいです……』

・・・・・え？

美鈴は一瞬、固まる。

紅魔館は基本的に関係者以外立ち入り禁止だ。その上、紅魔館に入ろうとする者自体あまりいない。

第一、入ろうとすると自らが迎え撃ち、中に入ればただでは済まないだろう。

しかし、彼は『ご飯を食べたい』というかなり異質な理由で入ろうとしている。

怖いもの知らず——いや、もしかしたらこここの事を知らないのだろうか

「すみませんが・・・・・関係者以外立ち入り禁止なんです。お引き取りください」

「・・・・なにい！」

いきなり、さっきまで無表情で大人しい彼の表情が、強張った顔になつたが、すぐに元に戻る。

かと思つたらなんだか悲しそうな顔になつた。

「えーと、とにかく無理です」

「・・・・・俺は腹が減りました・・・・・」

「ええええ・・・・・」

「・・・・・強行突破します」

ブロリーはそのまま、紅美鈴を無視してスタッタと涼しげに門をく

ぐりぬけよつとする。

「そんなこといつたつて・・・・・つたりよつとおおおー・?人の話聞いてました!?」

「俺が・・・素直に聞くと・・・・思つて、いたのか・・・?」

無視してスタスタと歩く。

（し、仕方がないですね・・・。ここは力ずくで止めさせてもらいますよ！見た目はかなり体格がいいですが・・・恐らく人間でしょう。楽勝です！）

彼女は、プロリーの後ろで身を構え・・・・・

「はあああー！」

プロリーに向かつて拳を放つた。

ドゴオッ

見事、プロリーの背中を捕らえた。

妖怪である紅美鈴・・・・力が人間よりも遙かに強い。たとえそれがどんなに力持ちの人間でもだ。

そのままプロリーに拳があたり、プロリーは吹き飛ばされるだろう

――彼が人間なら

プロリーはビクともしない。

「・・・・・ツ！」

吹き飛ぶどころか、数センチも揺らいでいない。

即ち、サイヤ人の中でも最強クラスのブロリーにとっては妖怪の怪力などどうってことない。

ブロリーは数秒間止まるが、後を振り返った。

「なんなんだあ・・・今のは・・・」

静かで低い声で言つ。

何事も無かつたよつに、無表情な顔だった。

「・・・ツー」

彼女は反射的に振り返ったブロリーの顔面に2回目の拳を放つが

ガシイツ！

彼女より素早く、拳を手のひらで受け止める。

「・・・そ、そんな・・・。貴方・・・人間じゃない・・・化け物ですか！」

美鈴は、驚愕の表情でブロリーを見る。  
ブロリーは相変わらず無表情。

「・・・俺が化け物・・・?・・違つ・・・俺は悪魔だ・・・」

そう静かに吐き捨て、受け止めた美鈴の拳を離してあげた。

そして、何事も無かつたかのように館の中へと入って言つた。

「え？・・・あ、あの」

「・・・・・・・・」

反撃されなかつた事が余程以外だつたのか、思わず呼び止め。それに応じたのかプロリーは立ち止まり、再度振り返る。そして・・・・・

（二）

柔らかい笑顔を向けた

「――え！？」

\*

プロリーは門をぐぐりぬけ、館の扉をあける。

そしてプロリーの視界の飛び込んだのは、豪華な内装と驚いた妖精メイド達の顔だつた。

メイド達が驚くのも無理も無い。いきなり身長2メートル越しの長身男が入ってきたのだから。

「プロリーです・・・・・。何か食べさせてください・・・・・

と、無表情で言つた。

だがしかし、メイド達は驚愕しており、動く気配もない。中には作業中で止まつてゐる者もいた。

「…………無視ですか…………ふふつ」

と、笑つた瞬間、何かギラギラと光る者が真つ直ぐに向かつてくる。

「…………へあツ！」

驚いた声なのが掛け声か解らないが、張りの良い声を出した。  
それと同時に飛んできた物を回し蹴りで蹴り飛ばす。

ブロリーはわずかに強張つた表情となり、バチツ、と彼の周りに緑の光が散らされた。

ブロリーは蹴り飛ばされ、地面に落下した粉々な物を見た。  
彼の蹴りでバラバラに砕けていたが、ナイフだと理解できた。

彼はナイフが飛んできた方向を見る。

「ツ――」

誰も居なかつた。

だが――妖精メイド達とは違つ氣配のある方向から感じた。  
彼はそちらを睨めつける。

そこには、少女がいた。

白髪で目が紅い――メイドの様な格好をした少女。

「私のナイフを碎くなんて、かなりの実力者の様ね。私は十六夜咲夜。この館のメイド長よ」

「ブロリー……だ

わつきとは違う、キツイ表情で言つた。

「貴方達、ここは私に任せ、わざと仕事を続行させなさい

咲夜は、まわりでアタフタしていたメイド達にそう仕向ける。

メイド達は理解した。本当の意味は『ここから離れなさい』という事を。

メイド達は慌てて何処かへと行つてしまつ。

「で、門番まで破つて、何のよつかしら？早く用事を済ませたいんだけど」

「お腹が減りました」

少し表情を和らげて優しく言つたが、すぐにキツイ表情になつた。それを見た彼女は

「あら、随分と移り変わりが早いのね」

「……」

「まあいいわ。今決めなさい。ここで今日の晩御飯になるか、わざと立ち去るか……」

「……腹を満たすまで、俺は帰る事が……できぬうー」

「……それが貴方の答えね……じやあ」

死になさい——

そう聞こえた瞬間、咲夜は消える。  
それと同時に、全方向からナイフが襲い掛かつてきた。

「ツ！—— ウオオオオオオオ！」

そう咆哮を上げた瞬間、彼の体から緑色のオーラの様なものが放射線状に全方位へ散らされる。

衝撃派の様な物が巻き起こり、ナイフは吹き飛ばされてしまった。

「ツ—— やるわね」

咲夜はそう言つ。

「・・・・・俺もほんの少し本氣を出そうか・・・・・」

「・・・・・あら？ 本氣を出さなくて大丈夫かのかしら？」

彼女はそう言つたが、実際には内心驚いていた。

あれだけの身のこなし、判断力、力。それでも本氣ではない、といふことに

そんな彼女を無視し、ブロリーは戦いに全力ではないが力を入れる事にする。

「・・・・・ツ！」

ブロリーの顔がさらに強張つた。

そして体全体に力を入れ——

——う、ああああアアアアアアアアアアアアアアツツ！——

——ツ！

その瞬間、そこら一帯のガラスやカーテンなどが破損する。そう、衝撃が走ったのだ。

さつきよりも強烈な緑の光が辺りを照らし、破壊した。

そして——ブロリーの姿に変化が見られた。髪が金色に光、逆立つ。眼光も緑に発光する。

オーラが溢れだしていた。

今彼の姿は『超サイヤ人』さつきよりも一段とパワーアップした姿だ。

「フフフ……ハツハツハツ、アアアアアアアツハツハツハツハツハツ！」

さつきとはまるで違う。静かな彼とは違く、堂々と、高々に笑う。まるで別人の様だった。

「お前、咲夜と言ったな。まずお前からねじ伏せてやる！」

咲夜は感じ取った。明らかに違う。

何かが理解できないが、自分の身に圧迫感を覚えた。ピコピコとした——何かを感じ取った。

「喰らいなさいツ！」

彼女は少し焦った。

そして時を止め——プロリーに向かって無数とも行つていい程のナイフを投げつけ——時を動かす。

プロリーは突然現れた無数のナイフを見るが、ニヤリ、と笑つて見せる。

彼の体を丸く覆う様に緑の光が出現する。

ガキイツ

その光に当たつたナイフは碎け散つた。

咲夜は一瞬で悟つた。

「バ、バリア・・・・ツ！」

「・・・デエヤア！」

ギュンツ

プロリーは地面を蹴つたかと思つと、物凄い速さで飛行しながら拳を突き出し突進してきた。

咲夜は急いで時を止め、避ける。そして時を動かす——

ゴシャアアツ！

プロリーの拳は、館の壁をすんなり破壊してしまつ。

「す、すごいわね・・・・」

プロリーは外した、と悟ると咲夜を睨めつけた。

「貴方・・・・手加減つて物をしらないのー?」

ブロリーは手加減?とオウム返しをすると、高々と笑つ。

「手加減はしてゐ。お前は本氣を出す者にあたいしないのだ!」

咲夜は背筋に凍りつく様な感触を覚えた。

このまま戦つても体力を消耗するだけ。次で決めよう。

シュンツ!

咲夜は時を止め、ブロリーの背後に移動する。

そして時を動かし――

「これで、終わりよー!」

時を動かし始めたギリギリの時間でブロリーにナイフを逆手で突き刺す。

彼女はブロリーはナイフをバリアや衝撃派、攻撃などで防いでいた。だからそういう前にナイフをブロリーの肉体に当たれば良いと考えたのだ。

しかし――

バキイツ

ナイフを突き刺すどころか折れてしまった。

「え・・・・」

「ふふふ……ああッハッハッハッハ！」

咲夜が驚いてる間に、ブロリーは隙をついてそのしなやかに長く、筋肉質な手で彼女の頭を掴んだ。

「しまツ——」

彼女が言い終える前に、ブロリーは空いた片手で拳を構えた。  
咲夜は時を止めて逃げようと試みるが——ガツチリと掴まれた頭は動かない。

そして——ブロリーの拳が放たれ——

彼女はとつそに田をつぶつた。

そして——

「・・・・・え？」

不意に、何も起きない。

恐る恐る田をあけると、拳は自分の田の前で止まっていた。  
そしてブロリーがそれを意図的にやつたと気付いた時には、頭を掴んだ腕は離されていた。

「な、なんで……」

ブロリーは、姿を通常の『サイヤ人』に戻し、咲夜を見た。

「お腹が減りました。君を倒せば食べれなくなります……」「

低い声で、若干笑つてそう言つた。

「えつと・・・」

彼女は反応に困ったのは言つまでもない。

本当に、性格の移り変わりの激しい悪魔だった。

「うーん、飯を下さーい」

卷之二

一  
しが

三

- - - - -

静寂かその場の空氣を支配した

話が續かない。言し返しても、状況が変わらなかつた。相変わらずブロリーは無表情。咲夜はさらに気まずくなる。

しかし、その場を破る救世主が現れる！

一体何があつたの咲夜あれ?」

「あつ、お嬢様！？」

「へアツー？」

紅い館 戦つて和解 紳士のプロリー（後書き）

プロリー「プロリーです。今回のゲストは美鈴と咲夜さんです」

美鈴「どうも！紅美鈴です！名前間違えないでね」

咲夜「十六夜咲夜よ」

プロリー「君達は俺と闘つてどう思つたんだあ・・・」

美鈴「えつ、そ、そりゃ――強かつたですね」

咲夜「貴方、何者なの？」

プロリー「俺は悪魔です」

「あ 「悪魔と聞いて駆けつけました！」

トランクス「嘘です！全て嘘です！プロリーは悪魔じゃなくてサイ

ヤ――」

プロリー「ゲストが追加されました…小悪魔ですかあ…」

「あ 「宜しくお願ひします！」

咲夜「まさかの追加ね」

美鈴「まあ、人数が多い方が楽しいですからね！」

トランクス「アハッ」

パラガス「トランクス。心配する事はない。お 約 束だからな

ちっこい悪魔 だが、悪魔は俺だあ！（前書き）

ブロリー「食べ物食べたいです・・・」

ちっこい悪魔 だが、悪魔は俺だ！

「 一体何があつたの咲夜 あれ？」

「 お嬢様！？」

「 ・・・だれだあ？」

いくつかの扉の中の一つが開かれ、その中からは幼い蝙蝠の羽の様な物を生やす少女が出てきた。

ブロリーは静かに言うが、その小さい言葉を聞き取つたお嬢様なる人物はブロリーを見た。

そして怪我はしてないが服装の所々が痛んでいる咲夜。次は粉々になつた無数のナイフ、壊れた部屋全体。

すこし険しい顔になり、少女はブロリーを再度見た。

「 まさかこれ・・・貴方がやつたの？」

「 ・・・はい・・・」

何ら反応を見せずに頷くブロリー。

少女はそんな彼に違和感を覚える。

「 何しに来たの？」

「 お腹が減つたんだあ・・・」

少女は驚いた様な顔になる  
その顔は何かを我慢する様な顔でもあった。  
そして――

笑いこけた。

「面白わね！で、そんな理由で館まで来て、こんな有り様にしたの？」

# 「何か悪いかあ？」

「ええ、凄く悪い事よ。こんな無茶な人は貴方が初めて」

だから――と少女は呟く。

「是非とも戦つてみたいわね。見た所、貴方は私には読めない『運命』を持つている」

ブロリーは少しだがピクリ、と反応した。

そして目を細めた。  
運命、と聞いてだつた。

もし、自分がこんな人生を歩んだのが全て運命のせいだつたら、

生まれた環境、生きる事すら許されない、破壊でしか表現できない  
自分

「運命、かあ・・・・・。だが、俺がこんな人生を辿った事、全て運命だとしたら・・・・・俺は、運命を

破壊し尽くすだけだあ！！」

ビュウウウウンッ！

髪が逆立ち、眼光は緑に発光し、緑の光が散らされる。彼は超サイヤ人になった。

それをみた少女はニヤリと笑む。

「戦う意思を見せたわね・・・・・、貴方がどんな力を持っているのかは知らないけれど、私はそう簡単にはへばらないわよ？」

ブロリーはさつきとはまるで違つ、切り裂くような微笑みを見せた。

「ああそうだな。お前がすぐへばらない様に手加減してやる・・・・・せいぜい、俺の遊び相手になつてもらおうかあ！！」

ブロリーの高ぶる感情と伴つて光がより強まった。

「へえ、随分と自分の強さに自信があるようね。見た感じ、貴方は人間じゃない・・・・・でも妖怪でもないわ」

「は、ツハハハハハツ！俺は悪魔だあ！」

「嘘つや。魔族でもないわ」

「…………お喋りは此処までだ。そつと始めようか……  
ツ。掛つてこい」

そつ言い、彼は腕を差し出し、指でクイツツと挑発した。

少女はニヤツツと幼い顔に似合わない、悪魔の様な笑みを浮かべる。

「私はレミコア・スカーレッドーの館の主であり吸血鬼！」

そう言い、少女——レミリアはブロリーに驚くべき速さで突っ込んで行く。

ブロリーはニヤリ、と笑い接近するレミリアを、無駄な動きをせず簡単に避ける。

「お前——中々速いなー流石は吸血鬼と褒めてやりたい所だあ！  
だが、俺を倒す事はできぬう！」

そつ言つた瞬時に、彼の手から光が漏れる。

そして、腕をレミコアの方向へと突き出し——

バシュンッ

氣弾が発射された。

レミリアは氣弾を避ける。

そして氣弾は屋敷の壁に当たり—— チュドオオオンツ、壁は

吹き飛ぶ。

彼女はプロリーを見た。

「へえ、弾幕も撃てるのね」「

「問う氣も無いが、貴様等はスペルカードって言う物を使つらいいなあ」

「へえ、解つてゐるじゃない」

「スペルカードって言つのは『技』なんだろ? お前のスペルカードも是非見せてもらいたいものだあ!」

「ふうん、いいわ。見せてあげる、私のスペルをね」

彼女は腕を上げ、プロリーを指差した。

「天罰『スター・オブ・ダビデ』!」

そう言つた瞬時に、レミリアを中心に複数の紅い球体が現れる。そして――ギュンッ

その個々の球体から紅いレーザーと、青い光弾を複数ばら撒く。普通なら避ける事が難しい技。弾幕勝負初心者なら一発でアウトだろつ。

だがプロリーは――

「遅いな!」

彼は戦闘力が高い。サイヤ人自体戦闘力が高いが、その中でも最強とも言えよう彼にはどうつてことはない

「やるわね、貴方。私の見込みはあつていたようだわ」

「スペルカードルールでは技を使う時、技名を名乗る必要があるから  
しいな……、俺もそのルールに則つてやうつか……」

そう言つと、ブロリーの右腕に緑色のエネルギーが集まる。

「喰らえ！『トライプショーター』！」

光を投げつけた——そして彼の手から離れた瞬間、エネルギー  
が無数の光弾へと分裂する。

その無数の光弾は、恐ろしく速さでレミリアへと接近していった。

「かなり難しい技を出してくれるじゃない！」

レミリアはそう叫び、まるで忍者の様な動きで無数の光弾を避けた。

そして、避けられた光弾は屋敷の扉へ向かい——ドオオオオン、  
これまた破壊される。

レミリアはしばらく余裕な顔をしていたが——

「……えつ？」

遮断された日差し、扉を壊した事によって館内へと入ってきた。  
それに気がついた彼女はすぐ、日差しから避けるように慌てて影へ  
と向かつた。

彼女は吸血鬼だ。強い半面、だから日差しを浴びると体が段々焦げ  
てくると言つ弱点もある。

だから口差しを避けるのだ。

「まつたく、冷や冷やさせるわ・・・。」そのまま戦つても館が持たないわね・・・すぐ片をつけよ

ブロリーとの戦いを続行する為、ブロリーがいた方向を向く。そして、次に視界に飛び込んできたのは――

「心配するなあ・・・。もう勝負はつこっているからなー。」

「ツー?」

ブロリーの手のひらだった。しかも、光が散らされてくる。このまま気弾やら何やら撃ち飛ばせばひとたまりもないだらう。

「勝負、あつたなあ」

――私の負けね・・・完全なる

もうつの時点で、レミリアの負けは確定した。

\*

「美味しいです・・・」

ブロリー（元に戻った）は、レミリアとの勝負に勝った後、レミリアが折角だからと食事を出してくれた。

彼は妖精メイド達が出してくれる豪華な料理を食べているのだ。かなりゆっくりと大人しく食べている用に見える。しかし、かなりの速さで料理が無くなる。

「…………食べ方にしては、料理の減り方が尋常じゃないわね……」

少し遠くから見ていた咲夜はそれに凄く疑問をもつていた。

「もつとくれないかあ…………？」

料理を運んでいるメイドに頼む。

「えええッ、まだですか！？」

「…………」

何かとションボリした様な表情になる。  
メイドはその顔に負けたのか、調理室に向かった。

「…………むり、摂取量も尋常じゃない…………」

咲夜は本気で考えていた。

（だいたい、彼は人間のかしら…………？でも見た感じ、妖怪でも吸血鬼でも妖精でもなんでもない…………

しかし、あの戦闘力はこの幻想郷でもトップクラスに及ぶ強さ。  
人間にも見えない）

そう考えていた間にも、ブロワーはもつ来た料理を平らげる。

「ふう…………満足だなあ…………」

やつ言つひ、ブロリーは立ち上がる。

「あー、帰るのかしさ。」

咲夜が問いかけた。

「元々、食事をする為だけにここに来たんだ……これといった用はもうない」

「あのね……」お店とは違つて、

「関係ない……」

（はあ……本当に、なんなのよこの人……）

\*

ブロリーは館から出ていき、幻想郷上空を飛行している。特にやる事も無い彼。これからどうするかを考えていた。館に入る前までは、あまりこの郷に興味は無かつたが、いざ弾幕勝負をしてみるとおもしろい物だった。

（……この幻想郷とかいう地——もしかしたらおもしろいかもしないなあ……）

そう呟いた。

ちつこい悪魔 だが、悪魔は俺だあ！（後書き）

ブロリー「レミリアお嬢様です・・・・・」

「わみじや」

フロリ！ ー・・・ あり？ 人違しかあ……？ 生首だ……

# ブロワー「・・・・・」

れみりせ - う

二  
四  
四

パラガス「パラガス  
う」  
う」  
」

ブロリー「……………えやッ！」バキッ

ハニカム

れみりや「うー

ブロリー「……ブロッキーあげるよ」

「！」  
わみにや・・

「親父イも可かあザれば

バラガス「よし、息子です。なんなりと

フロリー 親父イ・イ・イ・イ

ルチカの  
葛連にてるが…… おれにお前をお姫にできると言ふ

ブロリー「…………れみりやはペッジです」

パラガス「え、え、え、え、え、！」

戦いを求む伝説（前書き）

ブロリー「闘う意思を見せなければ、俺はこの幻想郷を破壊しつくすだけだあ！」

## 戦いを求む伝説

ブロリーは弾幕ごっこに興味を抱き、戦いを求めて幻想郷を飛びまわっていた。

（・・・強そうな奴を探そうかあ・・・・）

彼は無の表情で周り幻想郷を探しまわっていた。

彼は強そうな者を探していた。

かれこれ4時間は飛びまわっていた。

そんなに時間が掛つたのは理由があった。何故なら――途中、天狗に取材させられたからだった。

その天狗は速度が速く、ブロリーでさえ逃げるのに手間がかかった。

その為、空は夕焼け。

彼はサイヤ人だ。強い相手を感じ取つたり、相手の力を感じる事ができる。

故に、彼はその能力を使い強い相手を探し当てようとした。

「・・・・・そつちか・・・・」

彼は目を細め、その方向を見た。彼が見たのは下だ。

「でえいッ！」

ブロリーは一気に急降下する。

「ウオオオオオッ！」

だがそれだけでは留まらず、地面に風穴があいた。

そのまま掘り進み——ドゴォンッ

地下の空洞へとたどり着いた。

そして彼は下を見たが——かなり広い。

ここから地面までざつと、天と地くらいの差があった。さらに、何かと城下町の様になつてゐる。

まさに地底界だつた。

だが、彼は構わず地面へと急降下する。

ズドオオソンッ、地面を抉りながらも軽々しく、カツコ良く着地した

ブロリー。

彼は周りを見渡した。

「・・・・ん？」

なにやら、そこら辺にいた住民らしき者がこちらを驚きの目でみて  
いた。（何故かほとんど女性）

ブロリーは悟つた。今日の前に居る者全てが人間でがないと。

そう、恐らく人間がいないこの場所だからこそ、彼が導かれたのだ  
らう。

ブロリーはにやり、と爽やかに笑う。

「・・・・はははははっ」

だが、そう笑つたあと、引き裂くような笑みを浮かべた。

そして——

「フツツハツハツハツハツハツハ、ウワツハツハツハツハツハツ！」

口を大きく開き、高笑いした。

その笑い方には、さつきの笑い方とは違う、  
なにやら狂気まじりな  
笑い声。

「な、なによアンタ・・・・?」

住民が問い合わせてくる。

「ブロリー・・・だ。今からお前等は俺と弾幕勝負してもらいたいぞ・・・・・ツ！」

住民達は顔を見合せた。

「あ、アンタまさか妖怪なのかな？」

・ ツ  
・ 俺が妖怪・・・?違う。俺は悪魔だ・・・・ツ!ハツハツハ・・・

「嘘つきなさい！貴方はどうみても魔族ではないわ！かと言つて妖怪でもない！人間ね！？」

ブロリーは、ククツ、と悪魔の様に笑う。

「俺が人間最弱と思つていいのか…?」

「じゃあなんなのよシーリー

「俺はサイヤ人だ」

「はあ？！」

「さあ、手加減してやる。せいぜい俺を楽しませろ……」

ビュウウンッ

髪が青く発光し中途半端に逆立つた。

この状態は半超サイヤ人。中途半端な超サイヤ人。その気になれば、完璧な超サイヤ人にも、さらにそれを凌ぐ形態へとなるが、彼は手加減するつもりなのだ。

簡単に勝つても楽しくないからだ。

ざつと、周りにいる住民達はざつと10人位だ。

住民達は少し驚いたが、また顔を見合わせ、ふツ、と笑う。

「あつはつはつは！この数を相手に、手加減するだなんて、なんて身の程知らずのかしら？可哀そだから、まずあたし一人から相手よ！」

一人の住民がブロリーの前に立つた。

ブロリーはその住民を、その高い背で見降ろした。見下した。

「どつちが身の程しらずか————教えてやる……」

静かに笑う。

そして一人は一気に距離を取つた

「こつちから行くわよ！炎符『火炎車』！」

彼女がそう言った瞬間。

炎の円の様な物が現れ、ブロリーに向かって行つた。

ボオオオツ

ブロリーはそれを避けず、そのままそこにたたずんでいた。

「いけええええ！」

チュドオオオオオンツ！

ブロリーに直撃し、爆発する。爆風で煙が舞いあがり、その場が見えなくなる。

「どう？あたしの弾幕は

自慢げに胸を張る彼女。

今を見る様に、かなりまともにヒットした。強大なダメージを与えられるだろう。

回りの住民達も少しずわつき始める。

だが

「ふつはつはつはつはつは・・・・・ツ！」

「ツ？！」

煙の中からは、傷一つも無い無傷のブロリーがいた。

「こんなものか・・・・・。少々期待外れだったな・・・・・

「そ、そんな・・・・・、私の攻撃をまともに喰らって無傷だなんて・

・・・

ブロリーは一ヤリ、と笑つと。

「もうお前には興味がないな・・・。一瞬で止をつけてやる・・・  
ツ

住民は身を焦りながらも身を構え、守りを固める。  
しかし――――――――――――――――――――――――――

シュンツ

一瞬にして、ブロリーはその場から消えた。

「ど、どこに・・・・・・

その場に居た者が驚いた時にはもう遅かった。

「まだまだ遅いぞ・・・・

「ふえ？」

後から声がした。  
そして――――――――――――――――――――――

「ブラスター・シェル！」

ドオオオオンツ

\*

「もうダメよ～・・・強すきるもん・・・」

「戦い、負けた住民の一人は不貞腐れる様に行つた。

「折角手加減してやつたのに・・・こんなに雑魚だつたとはな・・・」

「その他住民達は、

「お、おい。こんな奴と弾幕<sup>ご</sup>つにすんのかよ・・・」

「絶対負けちやうよ・・・あんなに強い奴、あたしたちが全員で掛つても勝てないもの。」

「もう駄目だあ・・・おしまいだあ・・・」

「そこまで性根が腐つていたとは・・・いいだろ？、私が相手になつてやるー。」

「テテーン

「・・・」  
「・・・」  
「・・・」

「所詮、ムシケラといった所だあ・・・。いくら雑魚が集まつた  
無駄なのだ・・・！」

「ふん、次はどこつだ・・・」

「「「「「無理です」」」」」

声をもひて言ひ。

「・・・・腰ぬけめ・・・・・。しうがないな。見逃してやうつ

「さあ、流石男！女には優しんだな」

## なにがと調子に乗る住民

なんなんたあ  
その態度は

彼は右手を突き出し、拳銃を撃て準備のどりかかる

「すみません調子に乗りました！」

・・・・・まつたく・・

そういう、彼は普段のサイヤ人の状態へと戻る。

グウウウウウ

「・・・・お腹が減りーました・・・・」

そう詰めると、再び住民達の方を向き、

・・・食べ物をくれる場所つてあるのかあ・・・・?」

「え？・・・・ああ、あつちにあるよ」

「あつちかあ・・・・」

\*

ブロリーは店に入る。

外の城下町の様なだけに、中も江戸時代っぽい。  
サイヤ人であるブロリーに至つては、日本の文化など知る筈もない。  
そんな彼からすれば新鮮すぎる物だった。

「・・・・本当に店なのか・・・・」

「こりつしゃいませ！」

店員と思われる者がカウンターにいる。しかも女性。  
客席には少々の客。

ブロリーも薄々と氣付いているが、なんかこの地に来て女しか見て  
ない気がする。

しかし、人間の里の上を飛行していた時はちゃんと男がいた。  
だが、妖怪などの人外に至つては何故か女ばかりな気が・・・・・  
(なんで女しかいないんだあ・・・・まあいいか)

彼は疑問を振り払いつつも、カウンター前の客席へと向かう。

「何にしますか？」

ブロリーはメニューを見る。

メニューにあるのは――

焼き鳥（…………いやな予感がするな…………やめておけ！…………）

ご飯（カカロットの息子オ？）

味噌汁

焼き肉定食（上手そうだな…………）

酒（…………えつ…………俺、酒つて飲んでいいのかあ…………）

親父イ、生きてたら聞いてたんだが…………なんか虚しくなつてきな…………）

彼は父、パラガスの事を思い出した。

パラガスは自分が殺してしまっている。だが、それは裏切られたから。そして利用されるだけ利用されたからでもあった。

あの時、彼は伝説の超サイヤ人の状態。自分でも制御できない事もある。そのせいで、勢いで殺した。

今考えれば――

「…………親父イ…………」

「お客様、お酒ですよ」

不意に、店員が酒を差し出す。

「…………俺は頼んでない…………」

「いえ、の方ガ」

店員が腕をその方向へ向ける。

「？」

ブロリーはその方向を向いた。

そこには、もちろん身長2メートルのブロリーには劣るが女性の中では背の大きい女性がいた。

しかも、一本の紅い角を生やしている。服装は体操服の様なTシャツに、すこし透けたスカートを履いていた。  
おそらく鬼、という分類だろう。

ブロリーの視線に気がついたのか、あっちはまこっちを向いた。

「ん？ ああ、それおじつてあげるから」

彼女はそう返した。

「なんでだ・・・・？」

「いや、なんか悲しい顔していたからね」

「・・・・・」

「・・・・・なにか言いたそうな顔だね・・・・何があつたかは問わな  
いけど、まず飲みなよ」

「・・・・・俺は飲んでいいのか解らない」

「はは、言こに決まつてるじゃないか」

「・・・・・」

「遠慮しないで飲みなよ

ブロリーは渋々と、酒を口にする。

「…………うまいのか解らない味だな」

「へえ、まさか初めてかい？お酒飲むの」

「ああ・・・」

「ふうん、そう言えばさ、君って人間なの？」

「・・・・・サイヤ人だ」

「サイヤじん？・・・・・聞いた事ないなあ～？」

「・・・・・」

「まあ、そう黙るなよ。君って物静かだね」

「…………お前は『本当の俺』を見た事がないからそう言えるだけ・・・・・本当の俺はじゃない・・・・・俺は悪魔だ」

彼は不意に腕を自分の目の前まで寄せた。

そして、ポワーン、つと緑の光が漏れた。

この行為は警告でもあった。自分の事に触れるな、と。

「…………そつか。あんまり深入りしない事にするよ。人には触  
れられたくない過去があるものだしね」

「・・・・・」

そういう、ブロリーは酒を飲み干した。

そして呟いた。

「親父い・・・・あの世で、元気にしてるかあ・・・・」

# 戦いを求む伝説 (後書き)

# ブロワー

ハラカフ　ああ  
俺の出番はまたなのが…・・・・・

ペーパーバック

ブロリー 一次回

パラガス「ふふふあーっはっはっは、ふああっはっはっはっはー。」

パラガス「door!？」

いだ

ペラガク「」主 題

二十一

あのせかの嘘つの自分（前書き）

ブロッキー「ゼエエーは血祭りにあげてやる……シ……」

## あの世からの偽りの自分

「親父イ・・・・あのよで元氣にしてるか・・・・・」

ブロリーは、そう呟いた。

\*

ある世界のあの世の地獄

ここは、地獄だ。

だが、地獄とは世界ごとに違う地獄がある。故に幻想郷の地獄ではない。

「・・・・・ブロリーなのか?・・・・・」

「ガアアアアアアアア・・・・・」

地獄のある場所に、片目に傷があり、戦闘服の上に白い布をかぶつたすこし老いた男がいた。

彼はブロリーの父親、パラガス。

ブロリーを育て続けた張本人。そして、利用し見捨てようとした張本人でもあった。

だが、彼は後悔していた。あの世に来て、そう思い返した。

そしてその前にいるのは・・・・・

ドロドロな液体を被つた化け物がいた。身長はブロリーと同じくらいである。

目は紅く、心臓がむき出しへなっている。まさに化け物だった。その化け物はバイオブロリー。ブロリーのクローン。培養液を被つたせいで体がドロドロに溶かされ、原型が残っているのは後ろ髪だけ。

そんな見た目だが、パラガスは解つた。これはブロリーと似た様な気を感じる。サイヤ人の本能がそう伝える。

だが、それはブロリーではないとも伝えている。

「違うのか・・・・・いや、気の質はブロリーと酷似しているが・・・・・気がブロリーより低い・・・・・」

パラガスはそう言つ。

「ウワワアガアアアアアアアツ！」

バイオブロリーは、問答無用でパラガスに襲い掛かる。

「しまつた！」

しゅわっとッ！

パラガスはぎりぎり、上に飛行し回避する。

「くそあ・・・・・アイツの実力はブロリーに劣るが、凶暴さは上の様だな！」

「ウヴァアアアアアアアアアツ！」

バイオブロリーは全速力でパラガスの元へと向かつた。

「くッ、もうダメか・・・・・ツ！」

パラガスは目をつぶつたが

ギュイイイイイイイイイイイイイ

突然、光が漏れ始めた。

何処から発せられているのかは解らないが、とにかく強い光。

「な、なんだこれは！」

その瞬間、パラガスとバイオブロリーはその場から消えた。

\*

その頃、幻想郷にてブロリーは

ブロリーは、地下・・・・旧都から出てたばかりであった。  
あたりは夜。

月が辺りを照らしていた。

そしてブロリーは、止まる場所を探していた。  
今は人の里、という場所に行こうとしている。宿屋くらいあるだろう  
うと思つたからだつた。  
現在、空を飛行していた。

「・・・・ん？」

突然、胸や腕、足の到る所にはめ込んである真珠が光り始めた。

「——これは……」

彼は感じ取った。

自分に何者が語りかけてきていたと言つ事に——そしてそれは自分と似た存在。強さこそは違うが、何か自分の氣と共通点を感じられた。

そして、次の瞬間——キュウイイイイイイ

光が溢れだした。

そして——その中から

化け物が現れた。

「…………な、なんだお前は…………ツー

「ヴァアアアアア…………」

その化け物はまるでドロドロとした液体のような者を纏つており、心臓などがむき出しになつた化け物——それはバイオプロリードつた。

「…………お前…………俺か？」

彼は共感できた。

自分と似た様な気質をもつてているのは「いつの事だった。

「ヴァアアアアアアアアアアアアアアアア！」

飛びかかってきた。

ブロリーは、スッつと避ける。

「スピードは・・・俺以下のようだな」

だが油断できない。

どんな強さを秘めているのか知れた事ではない。自分と似た気質を持つているのなら尚更。

ギュウウンッ

ブロリーは、超サイヤ人状態となる。

髪が金色になり逆立つ。そして眼光が緑になる。

「でえいやッ！」

全力で突っ込み、全力のパンチを喰らわす。

「ウオオオッ！」

化け物がよろめぐ。

「死ねい！」

それに追い打ちをかけるように、後に瞬間移動し、キックを喰らわせる。

「グウウウッ、ウガアアアアアアアアアアアッ！」

キックを喰らわせるが、よろめいた反動で後を向き、あっちも拳を放つ。

「何――ぐああああッ！」

ブロリーは吹き飛ばされる。

吹き飛ばされながらも態勢を立て直す。

「ヴァアアアアアアアアアアアッ！」

バイオブロリーは氣弾を放つてくる。

「でえい！」

それに対抗し、ブロリーも氣弾を放つた。

バシュンッ、氣弾同士ぶつかる。

そして、1秒もしない内にブロリーの氣弾が圧し、バイオブロリーへと向かっていく。

「グアアアアアアアアッ！」

それはバイオブロリーに直撃する。  
それを見たブロリーは鼻で笑った。

「ふん、どうやら氣の使い方は俺の方が上手い様だな。取り柄はパワーだけ・・・その程度の実力では俺を倒す事はできぬう！」

「オオオオオーンツ

金色の氣がブロリーから大量に放出された。その金色の氣は実力の差を見せつけるようでもあった。

「グガアアア・・・ツ」

バイオブロリーは背を向け、逃げようとする。

「させるか！ 消えろ！」

彼の右腕から緑光が出現。それはやがて、大きな球体となる。ブロリーはそれをバイオブロリーへと投げつけた。

それは恐るべき速さでもう一人の自分へと向かい。

「プラスター・シェル！」

「グアアアアアアアツツ！」

直撃する。

バイオブロリーは力尽き、そのまま森へと落下していった。

「・・・・・終わったな、所詮、クズはクズなのだ。はは、ツハツハツハツハツハツハツハツハツハツハツ！」

ブロワー「ドロワーの強さについては作者の適当設定です…」「ドロニー「ヴァアアアア（…）れで終わりだと想つなよ」

パラガス「なんて事だ…。能天氣で足手まといな息子が増えた…」

# パラガス「DOOR!」

データーノ／

ベジータ「もつだめだあ……おしまこだあ……」「

「奴等を倒さなければ」の宇宙は終わりだ！』

パンツ 「あんな奴を生かしておいたら、宇宙は破壊しきくされて

「奴をこのまま生かしておく訳にはいきねえ！」

ブロワー「血祭りにあがへやる」

ドロワー「ヴァアアアアアッ！」

## 幻想郷に泊わフ 親父イとの再会（前書き）

パラガス「パラガスで！」やります」

ベジータ「パラガス！出しゃばるんじやない…」

ブロリー「お前がな」

ふおおッ、キイイイン ド「オオオン

## 幻想郷に泊わフ 親父イとの再会

ボオオオオオオンッ

幻想郷の森に、何かが墜落した。

「ウウ・・・・カ、アアア・・・・」

バイオブロリー。

彼は空中にてブロリーの氣弾によつて撃ち落とされた。  
そして、現在に至る。

「アア・・・・ガアアアアアアアアアアアアツ！」

バイオブロリーは怒り狂う。

理性がない彼の頭の中は、ブロリーへの復讐一色となつた。  
彼は空へ舞い上がり、ブロリーを探そうと飛び去つて行つた。

---

ブロリーは人間の里へと來ていた。  
泊る場所を探すためだ。

この地に住むと言う事になれば当然住む場所も必要となるだろう。  
恐らく、人里だから宿屋くらいあるだろう・・・・・と思つていた  
のか？ではなく思つていた。

現在は夜。と言つても夕方と夜の間。  
月が微妙に出てゐる微妙な時間帯。

人里には人が出歩いていたが、身長2メートル以上でイケメン、そして変わった服装のブロリーを珍しげに見ていた。

「何かと注目されているな……それより、宿泊場が先だあ……」

適当に当たつてみる事にした。

そこへんの住民に話かける。

「いじら辺に宿は無いか……？」

「う、うわっ、背でかい……って、あ、宿屋？」

「……つむ」

「い、こじら辺には——いや、宿はないけれど、止めてくれる所はあるかもしませんよ?」

「そりあ……で、心当たりはないのか

「えつと……うーん……あ、寺小屋とかは?」

「……寺小屋ってなんだあ……」

「あそこにある、少し大きい家ですよ

「あれか……」

\*

「うして、ブロリーは寺小屋の前に来た。

そして、ドゴドゴシ、と少々強めに門をノックする。

「…………反応がないな……」

ブロリーはすぐに憚れを切り、門を破壊しようとする。  
と、拳を振りかざした瞬間

「一体なんの…………うわー！」

「…………」

突然門が開かれる。

ブロリーはぎりぎりで拳を止める事ができた。

門から出て来たのは少女。頭に変わった帽子の様な物を被っている。

「い、いきなり殴りつとするなんて、何を考えてるんだ?！」

「…………早く出てこなさいお前が悪いです…………」

無表情で言つ。

「いや、早く出たつもりだよ。やいりくんの礼儀は重んじていろ

「…………それよりも用があつてきた…………」

「何?」

「宿泊ってできるのかあ・・・?」

「――宿泊?」

「あ

「ひむ・・・・・・ただで泊めるつのは少し抵抗があるんだが・・・・・

「

「・・・・・・・・

「ひむは非干屋だから、何かしら手伝ってくれるなんらい?」

「手伝いか・・・・・・面倒くさいこ・・・・

「やひひひは君の自由だ」

「・・・・・・・・解つた

「と言ひひ、条件を飲むつて形でいいか?」

「ああ

「そひか、まあ入りなよ

＊

「ひひが君の部屋。丁度空いてる部屋があつたから

「変わつた部屋だな・・・・・」

彼が連れられたのは、普通の庶民風の部屋。だが、ブロリーにとっては珍しい部屋。何せ、地球で暮らした事自体あまりない。

1時期、7年間居たがその時は氷漬けにされていた。

「自己紹介してなかつたな。私は上白沢慧音。この寺子屋の教師をやつてこる」

「……俺はブロリーです」

「ブロリー？ 変わった名前だな」

「……そうかあ？」

「君は外来人かい？ みた感じ、変わった容姿をしてるし……」

### ブロリーの容姿

身長2メートル超えで、上半身裸でチャンピオンベルトのような金色のベルトと、その下に赤いものを腰に巻くように付け、白い胴着を下半身に着ている。

首にはベルトに似た首飾りを下げ、手首にはベルトとデザインが同じ長めのブレスレットを装着。靴とベルトのデザインがほぼ同じ。そしてイケメン

「やう言つ事になる……かもしれない。詳しい事は話す気もない……」

重苦しく言つ。

そんな彼の様子に慧音は目を細める。

「何かしら事情がありそうだな」

そう呟く。

「・・・それよりも、手伝って何をするんだあ・・・?」

泊まる条件を思い出したブロリーはさすがに聞いた。

「まあ、簡単に言えば事業の準備を手伝ってほしい」

「準備か。それだけか・・・?」

「うーん、後、休み時間とかに子供達に構つくらいかな?」

「子供か・・・?」

ブロリーは子供と聞き、以前戦った二人の子供を思い出した。  
その時に戦つたせいか、子供に構うと聞くと戦いの事しか思い出せ  
ない自分が何かと悔しいブロリーであった。

「他に聞きたい事は?」

「ない・・・?」

「それじゃ、『ゆづくつ』

そつと、慧音は部屋を出ていく。

「・・・・・やる事がないな・・・・・」

宿泊先が決まつたものの、まだ眠いと言つ訳でもない。  
彼は何かやる事を見つける事にした。

「夜の散歩でもいか・・・・・」

そう言い、部屋を出た。

\*

外に出たブロリー。  
もう夜になつていた。辺りに並ぶ家の1つ1つの明かりが、夜道を  
照らしていた。

「・・・・・素通りです・・・・・」

適当に歩きだす。

ダッダッダッダッダ

「・・・・・ん?」

だれかがこつちに走つてくる音がする。

「・・・・・敵か?」

明らかにこつちに向かつて来ている音。  
次第に音が大きくなつてきている。

「誰だ・・・」

ブロリーは身構えた。

もしかしたら、敵かもしれない。しかも夜だ。暗い所をつけ狙う輩もいる。

そして

「ブロリー！」

来た！ ブロリーはそう叫ぶ。

後からだ。

ブロリーはとつさに後に回し蹴りをした。バキッ、直撃する。

「DOOR!？」

叫び声がした。なんか聞き覚えがある気がするが、あまり気にしない。

どうやらヒットしたようだ。ブロリーは得意げな表情で、その者を見た。

が、ブロリーは驚愕した。

「へアッ！？ 親父い！？」

そり、田の前に居たのは地面に倒れた自分の父親パラガスであった。

「な、なんで親父が・・・死んだ筈じや・・・」

瞬時に疑問がたくさん生まれた。

「ふ、ブロリー、一体、どうしたと書つんだ、何故俺を……ま、まさか」

残念そうな顔になり、そつが、と呟く。

「無理も無いか……。お前を操り、その拳句見捨てたのは張本人はこの俺なのだからな……。」

「お、親父イ……。」

「すまん!」

ガバッ、と倒れたまま頭を下げる。

「これまでの事をすべて謝る!俺がお前にした、数々の仕打ち……。全てに対しても反省している。」

「親父イ……。頭を上げる……。」

ブロリーはパラガスの肩に手を置く。

「許してくれとは言わないが……。今まで済まなかつた……。」

「

「親父イ……。どうでもいいからそんな事より」

「ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、一匹でもいいって……。」

シコワツト頭を上げ、ブロリーを見た。

なんでこんな軽く流すんだー?…とそう呟く。

「どうやつて生き返ったんだ？」

「そ、それは——あの世で化け物と戦っていた——こ  
こに歸たのだ」

「……は？化け物ってなんだあ……」

「ゾロゾロした化け物だぞ」

ゾロゾロした化け物——ブロリーには見覚えがある。  
数時間前に氣弾で撃ち落とした者。

「……そうかあ、あの化け物はあの世から来たと言つ事にな  
るなあ……」

「お前のあの化け物にあつたのか？」

「……はい……」

「そうか……——と書つよりも、——はめどりだ——」

「幻想郷だ……」

「幻想郷……ま、まさか……」

パラガスは驚愕する。

ブロリーはそんな親父に疑問を抱いた。

「知つてゐるのかあ？」

「ああ、知つてるとも。かなり前の事だ。地球に帝国を築き上げる  
為に事前に地球の事を科学者に調査させた時に知つたのだ。  
詳しい事は探れなかつたが、たしか妖怪とか言う化け物が住んで  
いると聞いた」

「……だいたいあつてる」

「む、まさかブロリー。妖怪とあつたのか?」

「はい・・・・・」

「せうか・・・・・では本当に幻想郷なのだな・・・・ん、待てよ、  
住む所は確保してゐるのか?」

「はい・・・・・」

「そうか・・・・・。流石俺の息子だ。俺と似て下準備は欠かさないん  
だな。はあつはつはつはつ!」

「全然似てないです。俺の方が上です・・・・・」

「ゑ、ゑ、ゑ、ゑ、ゑ、ゑ、ー? そんな事があらう筈はずいません。  
この私より頭が劣るブロリーが、この私以上など・・・・・」

「なんなんだあ、その態度はあ・・・・?」

「シユワツチトツーお助け下せー!」

「・・・・できぬう!」

「あああつはつはつは、あああつはつはつはあああ・・・・・」（泣）

「テテーン

\*

寺小屋では――

「夕食の準備は終わりと・・・。ん？」

ガラガラ、扉が開かれる音がする。

「ブロリーか？ 確か出ていった筈・・・帰つて来たのか」

そう言い、慧音は玄関まで行つた。  
そして、慧音は驚く。

「ふ、ブロリー。そこの傷だらけの人は・・・・・」

「親父イです」

「ブロリーに八つ裂きにされたバラガスでござります・・・・・」

ブロリーに八つ裂きにされたバラガスは無理矢理、涼しげに言つ。  
体のあちこちに傷がある。

だが、無理矢理なだけに顔が引きつり、その痛さが伝わつてくる。

「ブロリーの父・・・・本当に父親？似てないと言つか・・・・だ  
けど変わった服装と言う事は共通してる・・・・」

「…………似てるなどと、その気になつていていた俺の姿はお笑いだつたぜ…………ふああつはつはつはは…………」

何やら泣きそうに言ひパラガス。

さつき、自分の息子に言われたばかりなのに――こんどは他人から言われるとは……。パラガスは非常に悲しくなつてくる。しまつた、つと慧音は慌てだした。

「す、すまん、気に触つたか?」

「その様な事が有ろう筈がございません。慣れっこだからなあ……」

パラガスは強がりを言つた。

ブロリーは無表情だが、普ツツと一瞬笑つた様な気がする。

「慧音。親父イも泊まらせるがいいか?」

「ブロリーと同じ部屋ならいいが」

「解つた…………。親父イ。こつちだあ」

「…………では、ゆつくつさせてもりうといじよつ。ありがたく思つて

と、パラガスはせめてもの礼儀で慧音にお辞儀する。

「親父イ……」

「?」

# 「一人用のポッド

ブロリー「作者めえツ！投票が遅いです…」

「やめなあー。お助けくださいー。お助けおおー。」

アーリー・ケンかあ

作者「事情があたんです！学校とか期末テストや！」  
ならず者「反抗する気か!!」

「そこまで性根が腐つていたとは……」

ベジータ「馬鹿な作者め…」

「ノンペローダのせじき出したデータによつますと作者は  
壊れでおつますじやwwwうわへへwww」

ブロリー「ここがお前の死に場所ダア！」

デーティング

「自分はあ、ブロワーの手によつて手厚く葬られました」

手書きだよ。(前書き)

ブロッキー「やあ。ブロッキーです。... 今回まごとに書く手書きです。... まー...」

夜

ブロリーは、寺子屋の部屋で寝ていた。  
彼は『掛け布団』で寝るのは初めてだった。第一、人生のほとんど  
を破壊でしか経験していないか彼にとつては、布団で寝ること自体あ  
まりない。

彼は今まで味わった事のないまことにした時間を過ごしていた

だかしかし バテガスは違う

バラガスはこんな夢を見ていた。

「どこにいくんだあ・・・・?」

「お、お前と一緒に……非難する準備だあ！」

「一人用のポッドでかかる……？」

「ツ・・・・！」

ガシツ・・・・・バキバキツ

「うああああ、ウオオオオオオオオオオオツ！」

バキバキバキメキツ

「ぐおおおおッ、自分の子供に殺されるとは・・・これもサイヤ人の定めか！」

「グウウウ、ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！」

バシユツ、ヒュウウウウウウウウウウ

デ  
テ  
ー  
ン

「ふああつはつはつはツ!、ああつはつはつはツ(泣)」

## そして現実

—シムラジアジ—

バラガスは跳ね起きた。

そして今、掛け布団と敷布団に挟まれている。  
そのせいでこんな夢を見てしまったのだ。

「親父イ・・・・・、うねねヒー、」デキヤツ

「DOORツ！？」

そして違う部屋にて慧音は

「うう……騒がしいな……」

そして次の日

朝、ブロリーは日が覚める。

「…………朝かあ…………」

そういう、彼は布団から出る。  
そして、少し離れたパラガスを見る。

「DOOR!」「くアツ!？」

突然パラガスは跳ね起きる。

それにブロリーはお馴染みの叫び声をあげた。

「ゆ、夢か…………ん、も、もう朝なのか…………」

実はパラガス。あれからずっと悪夢を見て寝れなかつたのだ。  
目の下のはクマがあつた。

「くそお、寝不足になつてしまつた……」

「親父イ…………」

「なんだブロリー」

「俺は慧音の手伝いをしなきゃなんないんだ……親父イは手伝うのかあ……?」

「……いいかブロリー。寝不足の俺が手伝つたりしたら、足手まといになるだけだらう?」

「…………そつかあ……（もし）アーティニアになつたら血祭りにあげてやる……」

そういう、ブロリーは部屋から出て行く。

\*

朝、ブロリーは慧音に会いに彼女がいそうな部屋を片つ端から当たつた。

「……あつちかあ……?」

そういう、襖を開けた。

「むう……?」

何やらおいしそうな匂いがした。

そして、ブロリーは部屋を見わたす。

そこにはかまどなどを使って料理する慧音がいた。

「あ、ブロリー。丁度良かつた。そつちのかまどにも火を点けてくれ

「…………」れかあ・・・・・

「道具とかそこにあるから、それ使って」

マッチ、の他にもチャッカマンとかある。

思い返せば、家や置物、家具から小物まで時代に囚われていない物ばかり。

原始的な物もあれば、チャッカマンなどの技術が発達している物様々。

と、関心しているブロワーだったが、使い方が解らない。  
と言つたか彼はそもそも道具を使う氣はない。

「・・・・

彼は薪が並べてある所に手をかざした。  
やがてその手は緑色の光を散らし――

バシュンッ

小規模の縁の氣弾が薪へと向かい、直撃する。

ボツ　見事に火がついた。

それを横目で見ていた慧音であったが、少々驚いた様にブロワーの方を見て言う。

「君・・・・能力があつたんだ・・・・・

能力――この幻想郷では主に妖怪や妖精、または魔法などを使う一部の人間がもつ物。

当然一般の人間がそんな能力を持つてはいる訳がない。修行をすれば

使えない事もないが、まず普通の人間はそんな事は考えない。と言つと、話は簡単。プロリーは普通の人間じやない。

「……これがどうかした？こんなのは普通じやないのか？」

プロリーは幻想郷に来て、不思議な力を持つ者にしか会つてない。それ故、これが当たり前だと思っているのだ。

「いや、ここらの一般人は能力を持つ者が少ない」

「そうなのかあ……ん？」

プロリーは何かに気がついた。

彼の目線は鍋。

「……慧音」

「？、なに？」

「もう煮えてるぞ？」

プロリーは鍋を指差す。

鍋には味噌汁が入つていたが、無駄に沸騰して今にも漏れそうだった。

「え？ ああああッ！」

彼女は驚き、慌てて鍋をかまどから取り上げた。

\*

料理が終わり、テーブルには料理が並べられている。

それは普通の和風料理。ご飯、味噌汁、魚、その他おかず少々。それが3人分だった。

二人は座布団に座り、食べ始めようとしている。

「プロリー、君の父は呼ばなくていいのか？」

慧音が問いかけた。

二人が作った料理は慧音、プロリー、バラガスの3人分。

「…………ん？ 親父イか？ そうだな……」

だがその次の瞬間、プロリーは「あ？」と何か思いついたような表情になる。

（親父イは今寝ているな…………だったら、俺が親父イの分を食べても問題はない……）

そうひらめくと、プロリーは慧音にこう言つ。

「親父イは寝ているから、俺が親父の分を食べる……」

「え？ 寝ているの？」

「はい……」

「そうか、じゃあ食べようか。待つのもなんだしな」

そう言つと、慧音は手を合わせる。

「いただきまーす」

そう言った。

ブロリーは「は？」と訳の解らない表情をした。

「ん？ どうした？」

「・・・『いただきまーす』ってなんだあ？」

その言葉に慧音は以外そうな顔をする。

「以外だな・・・しらないのか？ いただきまーすは、料理を食べる前の挨拶だ」

ブロリーはサイヤ人。 地球の事、ましてや日本の風習なんて知っている訳がない。

故にそれに疑問を抱ぐ。

「・・・それをやらないとダメなのか・・・？」

こくりと頷く彼女。

ブロリーは少し険しい顔になつたが、早く食事をしたいのでやる」とにする。

「いただきまーす」

「よくできました！」

「・・・子供扱いかあ・・・？」

そつ良い、食事を始めた。

・・・・・

食事を初めて1分もしないが、ブロリーはもつ食べ終わってしまった。

慧音はブロリーの食いつぶりに目を引かれ、食事に集中できなかつた。

「は、早いな。食べるの」

「あれくらこならブロリーです・・・・・」

「君つて・・・・・本当に人間なのか?さつきの能力といいその食べつぶりといい、色々と異常なんだが・・・・・」

「・・・・・俺は悪魔だあ・・・・・」

無表情な優しそうな顔でいう。

慧音は半信半疑で「へえ・・・・・」と呻る。

ぶつちやけ、如何にも好青年みたいなその顔で悪魔なんて言われても説得力がない。

だが彼女は知らない。彼の違う姿を――恐ろしい力を

「・・・・・慧音。食べ終わつたらわつせみたいに挨拶するのか?」

「ん、食べ終わつたひがひがひつまだ」

「・・・・・うひがひがひつまだ。いつかあ?」

「そり。今度から言ひ様にね

「はい・・・・・、ん?」

ブロリーは何かに反応する。

それは声だ。なにやら騒がしい。

まるで無邪氣の子供——いや、子供そのものの声。

「ん、そろそろ来たみたいだな」

慧音が立ち上がる。

「どに行へんだあ・・・・?」

「そろそろ授業が始まるんだ」

「そりかあ・・・・俺は何をすれば良いんだ?」

そう、ブロリーは宿泊させてもう一つ条件として手伝つをする約束をしていく。

「確か一時間目に体育があつたな・・・・君は体格が良いから、運動が得意なのかな?」

運動・・・・もはや彼にとつては息をする位に簡単な事。

彼は戦闘民族。故に、戦闘が本職の彼にしては準備運動にすぎない。

「・・・・ふん、簡単な事だ」

「やうが、じゃあ子供たちの相手をしてくれ。やる事は後で連絡するよ」

「…………1時間目は俺はビリすればいいんだあ？」

「まあ、適当に授業を見るといい。子供たちの顔を覚えて貯うのに丁度良い」

「…………」

\*

こうして授業が幕を開けた

「…………それで全ての妖怪が初めて博麗大結界が妖怪にとってメリットとなると解り、騒動が収まつた」

教卓では慧音が先生として、子供達に説明をしていた。

子供の中では真面目に聞く者もいれば、単に集中してない者と座つていて足が痺れて集中できない者もいる。

だが、集中してない者が多い…………いや、集中できない者が多くつた。

何故ならば後でブロリーが立つて見学しているからであった。

それもそうだろう。長身筋肉質かつイケメン がいるのならば。

しかもたまに「全然解らないです……」とか「カアカロツトオ……」とか呟いているのなら尚更。

そんな調子で授業は続いた。

\*

よく頑張ったがどうとう時間が来たようだなあ！  
内容はサッカー。

昔に博麗大結界で外の世界と遮断された幻想郷にそんな競技がある  
訳がないが、まれに来る外来人がサッカーを伝えたらしい。  
それで幻想郷でもサッカーは競技の一つとされている。  
そして場所は外。名は無名の丘。

広く、自然が豊かな草原だ。丁度、運動するにはもってこいの場所。  
そしてブロリーの中では暴れるのに持つてこいの場所もある。

「じゃあ皆、この時間は彼が面倒を見てくれるぞ」

「ブロリーです・・・」

子供達がざわついた。

「やつぱり、あの人つて新しい先生だったんだ」  
「でも格好がへんじやん」  
「イケメンだよ」  
「物静かそうだね」  
「でも筋肉しゅごーい」

一斉に多彩な会話が耳に入る。

「皆静かにー。じゃあ、事前に決めたチームに分かれてゲームスター

\*

「・・・動きが遅いなあ・・・」

サッカーをしている子供達を見て、ブロリーはそう呟いた。

「そりか？あれくらいの子供だつたら、普通じゃないか？」

「・・・わうなのがあ？」

と、そんな会話の途中。

「ぶるりー先生～」

子供が話かけてくる。

(先生つてなんだあ？)

そしてブロリーにサッカーボールを差し出す。

「先生もボール蹴つてみてよ」

「・・・俺がかあ？」

「うんー見たいよね皆ー。」

うんーと一緒に頷く子供達。

ブロリーは無表情な表情の中に若干に戸惑いを見せつつ、ボールを受け取った。

そして、ブロリーのキックオフが始まる。  
ルールは、ブロリー一人対子供9人。

故に、ここで外すとかツコ悪い。

ブロリーはボールを向き、次のキーパー、ゴールを見る。

「……フンッ！」

バンッ！

彼はボールを真上に蹴り飛ばす。

ヒュー、ボールは真っ直ぐ上に飛んで行った。

それを合図に子供達は動き出す。数人がブロリーへと向かって言った。

ポン、ヘディングで受け止める。

ポンポンポン、そのまま子供達をおちよぐるよつて頭でボールを受け止め続けた。

だが、数回やつた所でブロリーは回し蹴りでキックする。

そしてボールは数メートル行った所で地面に落りよつとするが――

ダッダッダッダッダッ

ボールが落ちる直前にボールを思いっきり蹴る。

ギュウウウウウウ

まるで空気を切り裂くような音がした。

キーパーは、ボールのど真ん中に居たが、ゴールの隅にボールは入る。

だけで収まると思っていたのか？

ボールはネットを突き抜け、遙か彼方へと飛んで行つた

「…………」

子供達は勿論、慧音も啞然した。

「す、すげー」

子供の一人がそう言つ。

ブロリーはニヤリ、と得意げな顔をしていたが……

「…………と言つより、ボール……あれ一つしかないぞ……」

「

「へああッ！」

慧音の突然の言葉。ブロリーはお馴染みの悲鳴を上げる。

「…………しようがない、俺が取りにいってやるッ……」

「いや、君が飛ばしたんだろうに……」

ブロリーは慧音の突つ込みをスルーし、ボールを取りにボールの飛んだ言つた方向に飛んで行つた。

（まったく……。それにしても……すごい運動神経だ……人間……レベルじゃない……妖怪、なのかな？）

「ねーせんせー」

—  
h  
?

「ボーリなくなくなつちやたし、プロリーせんせーもいなから・・・  
なにすればいいんですかー？」

うむ……仕方ないし、来るまで違う事を

爆発音が聞こえた方向を彼女達は見た。  
「—— と彼女はいつたが、それは破壊音と共に消え去る。」

そこには—— 3メートル程で人型の—— 何やらトロトロとした液体に包まれ、内臓が筋肉がむき出しになつた化け物がいた

「なッ！」

今、第一のアロリーが、彼女達の前に現れた。

バイオアーリーは懇意と子供達に向かい、大声で叫んだ。

なんだんだん・・・・・あれば・・・・

慧音は驚愕の目で化け物を見る。

そんな化け物に対し、子供達は泣くどころか声まで出ない。ただそ

「で、怖くて動く事もできない

慧音は、瞬時に化け物からの殺意を察知する。

相手は襲い掛かってくると理解した。

それは予想どいつの結果だった。

「ヴァアアアアア・・・・・

この世の生物ではないような呻り声を上げ、バイオブロリーは慧音へと、ゆっくり歩いてくる。

ドチャ、ドチャ——その体に纏う液体のせいか、歩く「」と奇妙な音を響かす。

「クッ——」

明らかに正常な生き物じゃない。そう悟った彼女は全力で戦う他ならない。

教え子もいる。何としても守らなければならない。

「スペルカードで行くしかないな・・・・・

「つづり——」彼女は叫んだ。

「田出づる國の天子!」

そう叫ぶと、彼女の目の前から無数のレーザーが発射された。

それはまさに太陽が地を照らす様だった。

そんな無数のレーザーがバイオブロリーに襲い掛かる。

これは彼女のラストワードだが、異常な化け物を相手にするには最初から本気を出した方が良いと感じたのだ。

もはや、相手はスペルカードルールを守らないでくるだろう。それは、相手の理性のなさで解る。

下手をすれば、これは単純な殺し合いになるかも知れない。

ドオオオオオオオオンツ

光線は化け物にほとんど直撃する。

破壊大舞し上たる

「…………ベジ、やはり、あまり聞いてないようだ……」

煙の中から出て来たのは、ほほ無傷とも言えようバイオブロリーだ  
つた。

「ガアアア、ヴァアアアアアアアアアアアアアツ！」

バイオブロリーは手のひらを慧音へと向ける。

緑の光が現れ、それを投げつけた。

「おうとー。」

そういうの、ギリギリ避ける。

チユドオオオオンッ！避けられた光線は地面へ直撃すると、爆発を起こす。

スペルカードルールには、技を繰り出す前に、技名を言つのがルール

ル。しかし、化け物は技名を口にしてはいなかつた。

「くそ、何か打つ手は・・・・」

「ヴァアアアアア！カアカロツトオオオオオオオオオツ！・！・！」

ズキュウウウンツ！バイオブロリーは凄い速さで慧音へと接近する。

「しまつた――うぐッ！」

化け物は慧音の田の前で停止すると、腕を掴みあげ慧音を宙ぶらりの状態にした。

「ヴァアアアアアアツ！」

化け物が慧音の田の前で大きく口を開け、呻る。

恐ろしく歯をむき出しにし、もはや人の粘膜ではない口の中が露出された。

そして――空いている片方の腕を構える――

「くつー！」

そして、腕は振り下ろされた――

手伝いだよ。（後書き）

ブロリー「何イツ！？まだ生きていたのか…」

パラガス「先生がピンチ――」という訳だ

孫悟空「オラあ、ワクワクすんぞ！そのバイオブロリーって奴と

戦いてえな！」

ドロリー「ヴァアアアアアア…（呼んだか？）」

孫悟空「やベツ！逃走

ブロリー「ビニにいくんだあ…」

孫悟空「おめえ等ちよつとしつけえぞwww」

ベジータ「タイトルからしてもうダメだあ……おしまこだあ……」  
孫悟空「ベジータの奴しちゃがねえなあ（笑）」  
パラガス「……」（眠り一です）

「しまつた——「うべッ！」

バイオブロリーは慧音の腕を掴みあげ「ふらりの状態にした。

「ヴァアアアアアアッ！」

化け物が慧音の目の前で大きく口を開け、呻る。

恐ろしく歯をむき出したにし、もはや人の粘膜ではない口の中が露出された。

そして——空いている片方の腕を構える——

「く、くそ……せめて満月だつたら——夜だつたら——  
——ツ——」

そして、腕は振り下ろされた——

「せ、先生……！」

子供が叫んだ。

そして次の瞬間、響いたのは轟音——

と思っているのか？

チュドオオオオンッ！！

突然、バイオブロリーの脇腹に光弾が直撃した。

「ヴァアアアアア！？」

化け物は態勢を崩し、慧音から手が離される。

「…ハセヲ」

いつもにない女性らしい声を上げ、慧音は地べと落ちた。

慧音は態勢を直すと同時に、光弾が飛んできた場所を見た。  
そこには

「ブロリー」

そう、ブロリーがいた。

彼はいつも無表情な顔をしてしまるか  
今は強張った強い表情をして  
いる。

「化け物が・・・まだ生きていたのか・・・」

髪が金色に輝き、眼光が緑に光る。超サイヤ人になつた。

その見た事のないもう一つの姿に、慧音は驚く。

「止めるを刺してやるー！」

強く言ひ。

彼の声にはいつもない——強さと、勇気と——何より殺意が籠つていた。

「つおおおおおおおおッ！」  
「ヴァアアアアアアアッ！」

両者一斉に飛びかかった。

ズダダダダダダダダッ

激しい殴り合いが始まる。  
そのままブロリーは地面に直撃する。  
そのスピードはすさまじく、慧音達から見れば何が起こっているのか見当もつかない程。

「ぐあああッ！」

バイオブロリーの拳がブロリーにヒットする。  
ズドオオオンッ、地に大きなクレーターができた。  
ズドドドドドドッ！  
それに追い打ちをかけるかのように、化け物は一回一回重い攻撃を何回も撃ちつけた。

「グアアアアアアアアアッ！？」

「ヴァアアアアアアアアアッ！」

ズドオオオオンッ！さうに重い一撃がブロリーを襲つた。

「ぶ、ブロリー！逃げろ！勝てっこない！アイツは化け物だ！」

慧音が叫ぶ。

ブロリーは倒れるが――ふん、と吐き捨てるとその場で起き上がり距離を取つた。ペロリと口もの血を舌で舐め、ニヤリと笑う。

「つ？」

「ヴァンジ?!」

慧音とバイオブロリーは、その場違いな態度に疑問を抱く。ヒュンッ！ ブロリーは瞬間移動し、バイオブロリーから十数メートル離れた場所へと行く。

「ふん、やるな・・・。だが――その程度のパワーで俺を倒す事はできないなあ！」

そう言つと、ブロリーは手を握りしめる。

「ああああああアアアアアア、ア、ア、ア、ア、ア――！」

突然叫ぶ。だが、その叫びはただならぬ悪寒を感じさせられた。まるで――背筋を凍り付けられるような――

その途端、この場の空気が変わつた。

ブロリーの周りに緑色の光が集まつて行く。  
「オオオオ、暴風を巻き起しつた。

空は曇り、稻妻が轟く。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ――！」

野獸の様な叫びと共に、ブロリーが炸裂する  
その炸裂と共に、有り余った閃光が放出された  
ズドオオオオオオオオオオオオンツツ！！

「ぐ・・・ツ」

100メートル以上離れた所に居る慧音や子供達さえ、バランスを崩しそうになつた。  
だが、ブロリーの近辺は恐ろしい事になつていた。  
地面は抉れ、ブロリーは宙に浮いた状態。  
そして当のブロリーは――

筋肉が膨れ上がり、背丈が3メートル以上まで大きくなる。  
そして目は白目をむき、表情はまさに悪魔。  
髪が金色から黄緑に輝き、さつさに増して髪が逆立つていて。  
これが――サイヤ人最強にして君臨する彼の姿――  
伝説の超サイヤ人

「な、なんなの・・・あの姿・・・・」

慧音は驚愕する。もはや、動く事すらままならない程の驚愕に見舞われていた。

見た事もない姿――霧岡気が違う、別人のような――本当に彼はブロリーなのかと思つくらいであった。

ブロリーはしばらくそのまま、恐ろしい形相だったが、ニヤリと笑う。

そしてもう一人の自分へ、人差し指を向けてこう言つ放つ。

「 まざお前から ━━━━ 血祭りにあげてやるー 」

そしてブロリーは構えると  
言葉にも叫びにもならない声を上げ、バイオブロリーへと飛翔し突  
撃する。

ズドオオオオオオツ！

彼の通つた地面の後は、触れてもいらないのに抉れ崩れる。

それほど、彼の気圧が大きいのだ。それは触れずとも被害が及ぶ。

「 でええいーーー 」

ズガアアアンツ！

彼の鉄拳が敵に衝突した瞬間、轟音が鳴り響いた。  
バイオブロリーは吹き飛び、そのまま森の中へと吹き飛び、木々を  
なぎ倒しながら転がり倒れる。

「 つ、ウウウウウヴァアアアツーーーー 」

バイオブロリーは怒り狂いながら態勢を立て直し、ブロリーを睨め  
つける。。

「 そつこなくちや面白くないー 」

そう叫ぶと、バイオブロリーの元まで飛翔していく。

「 ヴァアアアアアアアツー 」

バイオブロリーは撃ち落とそうと、無数の気弾を放つが

「ハツハツハツハツハツハツハーーー！」

ブロリーにはまったく効かない。

そうしてゐる間にも、木々をなぎ倒してブロリーが接近してくる。

そして

バイオブロリーを殴り飛ばす。

そのままバイオアーティーは吹き飛ばされた。

彼の手のひらに光が集まり、小さい野球ボール位の球体が出来上がり、また。

「フンッ！」

ブロリーはそれを投げ飛ばす。

バイオブロリーはそれを全力の気を放ち、撃ち落とそうとする。

緑色の光線が発射される。

ズガアアアアアアンツ！

球体と光線がブチ当たる。  
ズガガガガツ

両者一步も引かなかつた。  
一見互角に見える。だが

「ふう」

ニヤリ、ヒロリーは悪魔のまづな笑みを浮かべる。ギロウカノ、再びヒロリーの手に光が集まつ

ギコウウン、再びフロリーの手に光が集まり——ヒュンツそれ  
を放つた。

その瞬間、野球ボール程小さかった球体が、半径?メートル程にまで膨張した。

そしてノイズの口には捕され——その光弾はノイズの口へと直撃する。

「グウウウウウッ？！」

その瞬間——「オオオオオオオオオオオオオオオン！！

バイオブロリーは粉々に吹き飛ばされた

物凄い爆音が響き渡り、眩しい光が当たり一面を照らした。

「フツ、終わつたな。所詮、クズはクズなのだ」

\*

戦いの後、残つたのは一部破壊された森とブロリー。

「フフフフ、アアハツハツハツハツハ！」

笑い叫んだ。最初の優しそうな彼とは正反対の残酷で非道なまでに。

だが、その笑いは消えた。

「は、あああ・・・」

やがて、その表情がなくなり—— 髪、筋肉、背丈—— 全て普段のブロリーへと戻っていく。

彼はある事を思い出す。

それは、バイオブロリーの死に様

オオオツ！』

姿形は違えど、自分が死んだ時そのものの様に思えたのだ。  
カカロット・・・ブロリーも死に際にそう叫んだ。

そう思い始めた。

スタ、スタ、スタ

ブロリーは慧音と子供の元へと、戻つてくる。

さっきまでの悪魔のような姿だったのに、普段のフロリーに戻っていた。

「ぶ、ブロード…」

慧音は思わず呟きを漏らしつづけ。

いつ言葉も思いつかないのに、話掛けてしまった。

と、そんな慧音を余所に子供達は

「ブロリー先生！凄いよー！カッコイイー！」

などの歓声と共にブロリーに駆け寄った。

「・・・ふ・・・」

と少し笑う。

とまあ、こんなかんじで——寺子屋としての初日は終わりです・・・はい・・・

ブロリー「フツフツフ、フツハツハツハツハ！」

孫悟飯「あ、悪魔たん！」

パンツ 「あんな奴を生かしておいたら…（「や。アハツ！！」

孫博密「エトハツモニルモモガタガタ（笑）」

孫悟空「おめでた！」と云ひ正氣を立てて

オノハシ  
金井義久  
著  
株式会社  
大日本報道社  
1950年1月10日初版  
1950年1月10日第1刷  
定価  
1000円

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7154w/>

---

プロリーが幻想入りです・・・はい

2011年11月20日16時41分発行